

式江次第に龍鬚と見え、晉東宮舊事に、龍鬚席○說郭所引東宮舊事作龍鬚席、遊仙屈に、五綵龍鬚筵といへり、定家明月記には龍鬚とあり、龍鬚はほそる也、此龍鬚草をもて織成をいふ、龍須席通鑑に見ゆ、龍鬚をよづるは不祥の故事なれば、龍鬚と改めたるかといへり、一説に、龍鬚の音、兩主に近きをもて避る也ともいへり、今綵席をよびて龍鬚といひ、俗にはなござといふは、遺制なるべしともいへり、抄に俗又有九蝶筵依文名之と見ゆ、

〔遊仙窟〕今朝見好人、即相隨上堂、珠玉驚心、金銀曜眼、五彩龍鬚席、銀繡綠邊○下

〔蘇氏演義下〕孫興公問曰、世稱黃帝煉丹於鑿硯山、乃得仙乘龍上天、群臣援龍鬚、鬚墜而生草曰龍鬚、有之乎、答曰無也、有龍鬚草、一名縉雲草、世人爲之妄傳、至今有虎鬚草、江東亦織以爲席、號曰西王母席、可復是西王母乘虎而墮其鬚也、

〔箋注倭名類聚抄六坐臥具〕筵○中原書仙窟筵作席、龍須作席、見古今注、中山經注等諸書、未見龍鬚席之名、按唐宋間俗寫有鬚字作鬚者、詳身體類鬚條下、則知龍鬚即龍鬚俗字、然內藏寮式有龍鬚筵、民部省式有龍鬚席、蓋皇國古人誤認爲鬚髮字、遂作鬚也、

〔安齋隨筆前編二〕龍鬚筵 右同式○延喜內藏式 龍鬚筵三十枚、細貫筵二十枚あり、龍鬚は彩席なり、白石翁の説也、俗ニ云ハナゴザ也、

〔類聚名物考調度四〕りうびん 龍鬚

思ふに、これは疊の一重しとねなり、今の世に段錦ダシニシキといふ物を、りうびんと覺えたるはいかにぞや、唐に龍鬚席あり、その物をいふか、また今薩摩のくにより出る疊に龍びん有、目のあらさ壹寸ばかり有て、甚あつく、齒の太さ常には四五筋合たるが、長さは幅とほりたる有、是古への物なるべき歟、

〔三養雜記三〕龍鬚